

科学研究費助成事業（基盤研究（S））中間評価

課題番号	22H04991	研究期間	令和4(2022)年度～ 令和8(2026)年度
研究課題名	発生学的共通基盤に立脚した心臓疾患および縦隔疾患の統合的病態理解	研究代表者 (所属・職) (令和6年3月現在)	栗原 裕基 (東京大学・大学院医学系研究科 (医学部)・教授)

【令和6(2024)年度 中間評価結果】

評価		評価基準
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要であるが、概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれる
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(研究の概要)</p> <p>縦隔には心臓大血管、胸腺、気管、食道などの器官が含まれ、発生過程において多様な系譜の細胞が入り混じって器官形成が行われる。本研究では、これまで臨床的に別個に扱われてきた縦隔の各器官を発生学に立脚した視点で統合的に扱い、疾患成立と病態の解明を目指す「臨床発生学」の確立を目的とする。具体的には、神経堤細胞、咽頭弓中胚葉やマクロファージを中心に心臓など各器官を構成する細胞の共通起源と細胞系譜を明らかにし、それらの相互作用が先天性心疾患、組織石灰化、心筋梗塞後の組織修復、縦隔腫瘍などにどのように関わるかを解明する。</p>		
<p>(意見等)</p> <p>心臓及び縦隔組織の発生における細胞分化系譜、細胞系譜サブセット間の多細胞間シグナル連携解析につき、マウス lineage tracing と鳥類胚操作、空間トランスクリプトーム等を主力とした解析で確実な研究成果を得ている。これらの発生学上の知見を基に、先天性疾患のみならず石灰化病変や心筋梗塞後の組織修復、縦隔腫瘍などの病態における細胞間シグナルの意義を明らかにすることを期待する。</p>		